

瀬戸内国際芸術祭講義 報告レポート

松本市議会会派「誠の会」土屋 眞一

日時 令和7年10月20日月曜日

場所 瀬戸内国際芸術祭実行委員会事務局

高松市サンポート1-1 高松港旅客ターミナル3F

時間 午前11時00分～午後12時00分

講師 瀬戸内国際芸術祭推進課長 増田 敬一（香川県職員）

出席者 3名 太田更三、土屋眞一、中山英子

成果及び所感

瀬戸内国際芸術祭2025は、春38日間、夏31日間、秋38日間、計107日間に渡っておこなわれる。

会場は、瀬戸内の島々と沿岸部の全17エリアであり、全会期通して行われているのは、直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港、宇野港エリア。

春会期は、瀬戸大橋エリア。夏会期は、志度・津田エリア、引田エリア。秋会期は、本島、高見島、栗島、伊吹島、宇多津エリア。岡山県の一部も含まれている。

2010年に第1回目が開催され約100万人が国内外から訪れ、日本を代表する国際的な芸術祭となっている。今回で6回目を迎える。

2000年代の瀬戸内海はかなり汚れていて、汚染による赤潮、海砂利の採取などの問題があった。

また豊島の産業廃棄物投棄91万トンの反対運動、その処理に至る苦悩。

かつては、海を自在な存在と考えず、島を閉鎖したものと考えことから90年にわたる大島青松園などハンセン病患者の隔離の存在もあった。

瀬戸内海の島々の人口は減少し、高齢化が進み、地域の活力の低下により島の固有性は失われつつある。こうした美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内海の島々に活力を取り戻し、すべての地域の希望の海となることを目指すことが、この瀬戸内国際芸術祭の目的でもある。

2019年瀬戸内海の島々が、アメリカのニューヨークタイムスの「2019年に行くべき52カ所」の第7位に選ばれている。

「日本の内海にある芸術と自然の調和」と評されている。日本で最初の国立公園にも指定されている。

瀬戸内国際芸術祭が開催されてから、どのような変化がこの地域にあったかを見てみると、男木島においては1950年代、約1000人の島民がいたが、その後人口が減り続け2010年、人口200人を切り小中学校が休校となった。

その後、2014年小中学校が再開された。地元の島の方が瀬戸内国際芸術祭に関わったことでUターンしてきた。現在、島民の4割近くがIUターンや二拠点移住しているとの話があった。

直島については、地価が上昇している。

この国際芸術祭が島々の移住、定住のきっかけになったようだ。そしてこの芸術祭を支えるボランティアサポーターの「こえび隊」の活躍も芸術祭の重要な要素になっている。作品のメンテ、受付、地域行事のお手伝いなど島の人々と穏やかな繋がりをもっている。

この瀬戸内国際芸術祭が成功を収めているのは、現代アートが持つ魅力と明確なコンセプト、何よりこの地域の島々の人々の地域に根差した活動があり、それが結びついている成功事例だと感じた。

政務活動費

(1) 使途項目 研究研修費

(2) 支出額 受講料 15,000 円、+手数料 5 5 0 円

※その他旅費等については、(調査旅費) 小豆島町、高松市、萩市行政視察にて計上

—以上—